かんなづき October 10月

おおもり

医療センター大森病院
大田区大森西6－11－1
☎03－3762－4151（代）

病院長就任に際して

小原　明

平成27年7月から大森病院長2期目に任ぜられました。平成24年からの病院長1期目3年間は教職員の皆様のご活躍とご協力により、大森病院は良好な診療実績を挙げる事が出来ました。厚く御礼申し上げます。今回再び命を受け、副院長5名、院長補佐9名とともに、思いを新たに全力で取り組みます。皆様どうぞ宜しくお願い申し上げます。

大森病院の使命は、安全で質の高い高度医療を社会に提供する事、診療実績の向上に基づく健全で安定した病院経営を達成する事、そして教育病院として東邦大学4学部の卒前卒後の人材育成を担う事です。厚生労働省の医療政策は今後の高齢化社会、人口減少と、医療財政の逼迫を見据えて、医療施設に強力な指導を行っています。特に特定機能病院は社会への貢献、医療安全や感染制御、高度医療の取り組みのモデルとして期待されています。

今期院長就任直後の7月8日に、厚生労働省の医療法第25条第3項の規定に基づく集中検査がありました。この検査の目的は病院のガバナンス（統治）の現状、高難度入検査のテーマとなった病院のガバナンス（統治）についてです。社会が求めている「統治された病院組織」は、上から明瞭な指示命令が下され、規則を遵守しながら実行している組織である事。そして同時に大切な事は、下から上、現場から上司、組織の長に情報や意見が伝わる仕組みが保証され、組織改善が確実に弛まなく実行されている組織という事でした。2期目病院長として改めて認識しました。もう一つ印象深かったのは、今回のヒアリングを受けた2人の研修医と2名の若手看護師さんの活躍です。彼らとは事前準備で、病院組織の基本的な事項については認識を共有化して望みましたが、その他は何を聞かれても自由に答えてもらう様にしました。その結果、ヒアリングでは実に伸び伸びと大森病院の事を語ってくれたそうで、最後は時間が足りなくなり「もっと話したかった」との感想が聞かれた程です。ヒアリングをした検査官に好印象であったことは想像に難くありません。大森病院の若手の彼らを頼もしく思いました。

以上の様な2期目就任直後に偶然行われた厚生労働省の立入検査で感じた2つの事、適切なガバナンスと、若手を信頼し育てる事を大切にして、これからの3年間の院長職を勤め上げたいと思います。皆様、何卒よろしくお願い申し上げます。

医療技術の導入審査状況、インフォームドコンセントの現状を厚労省が把握する為のものでした。私は2期目病院長の試験のつもりでヒアリングを受けました。その際に強く2つの事を感じました。第1点は今回の立

大森病院執行部

副院長（業務管理担当）　盛田　俊介
副院長（救急・安全管理担当）　吉原　克則
副院長（診療・教育・感染担当）　瓜田　純久
副院長（病院機能評価担当）　住野　泰清
副院長（看護担当）　佐藤ちず子
院長補佐　金子　弘真
院長補佐　川合　眞一
院長補佐　落合　亮一
院長補佐　五十嵐良典
院長補佐　松裏　裕行
院長補佐　島田　長人
院長補佐　渡邊　正志
院長補佐　船橋　公彦
院長補佐　宮﨑　泰斗

副院長就任に際して

診療・教育・感染担当副院長　瓜田　純久

平成27年7月1日付で東邦大学医療センター大森病院の副院長を拝命した総合診療科の瓜田純久と申します。平成17年7月1日に青森から大森病院総合診療科に助教として戻って参りました。大学復帰から10年の節目で拝命した大役に戸惑いつつも、決意を新たにしております。

大森病院は小原病院長を中心に、2、153名の職員で972床、2、400余名の外来患者さんを診療させていただいております。個々に重要な役割を担っており、多職種が各々の仕事に取り組むことにより、病院がひとつの生物のように個性をもって機能しているように思われます。個々が同じ意識で行動すると、その行動はシンクロし、イワシの大群や渡り鳥の編隊飛行のように、美しくかつ効率的な動きをすることが知られています。日常業務を忙しく行っていると、限られた場所での限られた動きになってしまい、病院全体の動きを感じとることは難しいところです。イワシや渡り鳥も、集団の形を見ることはできませんが、隣との距離を一定範囲内にするという単純な規則だけで、まるで指揮者がいるかのような動きをします。これによって、外敵から多数を守ることができ、種を維持することができていると考えられています。アリは別のアリが出す揮発性フェロモンをキャッチして、行列を作ることが知られていますが、これも指揮者はいません。ある程度の距離が離れてしまうとフェロモンは揮発してしまうため、他のフェロモンをキャッチできず、孤立してランダムに動き回ることになってしまいます。ある確率で偶然フェロモンに遭遇するまで、ランダムな動きが続きます。これを繰り返し、アリの長い行列が作り出されていきます。

病院機能も同様に各々の仕事を着実に行うという、シンプルな法則のみで、大きな機能体として、成長することができるのかもしれません。自己組織化は生命の誕生に繋がる概念ですが、「医療に貢献する」というシンプルな認識を共有していれば、自己組織化を通して、病院という医療従事者の集団は、協調して大きくなることも、長く伸びることもできるのかもしれません。しかし、生命の進化と異なるところは、時間が極めて限られている点です。自己組織化には何世代もの交替が必要であり、限られた時間での組織化には、何らかの工夫が必要です。病院執行部は限られた時間での自己組織化を触媒する役割が求められているのかもしれません。大森病院がさらに社会と時代の要求に合った機能的な病院へと進化できるように、皆様とともに汗を流していきたいと思っております。今後ともご指導のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

院長表彰を受けて

新生児科　教授　与田　仁志

このたび、平成27年度の病院長表彰を戴けたことは、我々、NICU（新生児特定集中治療室）やGCU（新生児回復期治療室）で働くスタッフにとりましてもこれまでの努力が評価されたものと素直に喜んでいます。これを機会に東邦大学新生児科について皆様にご紹介しようと思います。

新生児科は一般的には小児科の一部門ですが医学部の講座としても独立している全国的にも珍しい大学です。小児科だけでなく産科学の素養が必要で、周産期医療の一翼を担う産婦人科の先生方とコラボレーションし、周産期専門医としてのプロ集団を形成しています。東邦大学周産期センターは昭和56年に始まり、昭和60年には初代新生児学講座教授として多田裕先生が着任されました。平成9年には全国でいち早く、総合周産期母子医療センターに認定され現在に至るまで東京都の周産期医療を牽引しています。東邦大学の特色は他の総合周産期センターと比較して、いかなる妊産婦・新生児にも対応できることです。これは病院としての総合的な実力がないと成り立ちません。産科・新生児科だけでなく妊婦や新生児を見守る多くの診療科があるからです。小児科はもとより、新生児の外科疾患にも対応できる小児外科医や心臓外科医、脳外科医、麻酔科医、眼科医、耳鼻科医、形成外科医、整形外科医などの先生の存在です。また、医師だけでなく看護師、助産師、薬剤師、臨床心理士、理学療法士、医療工学士など多職種のスタッフを巻き込んで病院を盛り上げており、病棟は活気に満ち溢れています。

自分の赴任当時（平成22年）、朝日新聞の「医療の危機―人材を集め育てる策を―」というタイトルの社説で「NICU」や「新生児科医」という言葉が紹介され、社会的認知をうけつつありました。こうした社会の追い風を背景に、文部科学省より設定された、周産期スタッフ養成に関する競争的補助金を着任早々に獲得できました。早速「東邦大学周産期人材育成推進室」を設置し多方面の活動ができ、人材育成と言えば東邦大学と言われるまでになりました。「周産期人材育成室」は教育研究支援センターの一組織として現在も事業を継続しています。大学全体を見渡して3病院が連携できる環境を整える事業にも協力できるようになり、この7月からは佐倉病院NICUにもスタッフを派遣しています。

また、赴任早々開設した「胎児超音波外来」は、新生児科と産科の共通の診療対象である「胎児」に焦点を当てた診療で、わが教室の特色の一つです。病児を胎児期よりご紹介いただくこのシステムは軌道に乗り、出産前から妊婦さんやその家族と関わり、出生後の新生児集中治療、退院後の発達フォローなど、小児科医として貴重な経験を積むことができます。そして、ここに集う小児科医や産婦人科医は、未来に通用する新しいタイプの周産期科医を目指して日々研鑽を積んでいます。皆様、是非、東邦大学新生児科（総合周産期センター）を見学に来て下さい。優しいスタッフがその魅力を厚く語ってくれます。周産期医療はまだ新しい分野であり、胎児や新生児の疾患には原因も治療法もわかっていないものがたくさんあります。その意味では、今後もいろいろな発見や開発が可能な「成長株」であり、若い医師には魅力的な領域だと思います。

2015年度　東邦大学医療センター大森病院
公開講座　開催予定（10月～12月分）

日　時	内　容	演　者
10月24日（土） 13：00～14：30	放射線療法と緩和ケア（仮）	放射線療法看護認定看護師 北爪　麻紀 緩和ケア認定看護師 池田　睦
11月24日（火） 17：30～20：00	「糖尿病教室市民公開講座」（仮）	栄養部　他